

高 2 難関大小論文入門



1章

【添削課題】

出典：滋賀医科大学・医学部・97年度

解答

問1

栄養や身体に及ぼす影響を考えて食物を義務のように摂取するのではなく、料理の香りや彩り、味わいを楽しむことに加えて、食事に集った者同士の会話などからも心の充足を得られるような楽しみ。

(九〇字)

問2

身体の健康というわかりやすい基準に執着し、それを充足させることに血道を上げている人たちを前にして、その価値観を共有していない者が、なかばあきれつつもその盲信的な努力に感服させられること。

(九三字)

問3

健康病であっても本人はそうとは思っておらず、それによる被害が潜行する点と、健康第一にしても自分に不安で、仲間をつくり、しがみつく相手を増やそうとする伝染性を持つ点、この二点がその理由である。

(九七字)

問4

【文章例①】

課題文筆者の基本的考えは、「心」「魂」「身体」というような、複数要素から人間の「健康」は構成される、というものだ。この考

え方に基づく、現代人が「身体」の健康状態ばかり気にし、他のことに关しては気がまわらず、自分同様の者を仲間にとする「健康病」は、まさに二元的な健康観である。私も、こうした健康観には賛同できない。

ただ、人間が生きていく上での原動力のようなものが筆者のいう「魂」で、それが充実していると「心」の健康も保たれやすくなり、その二つと連関して「体」の健康も維持される、という考え方は分かりにくい。特に人間は社会的存在であるという視点から、人間の健康とは、身体的健康・心理的健康・社会的健康という三つが相互にバランスよく調和した状態、と定義したい。その「社会的健康」とは、適切な社会的役割を持ち、自分の存在意義をその人間関係の中から感じとることから判断できるものである。(三九二字)

【文章例②】

病気になることを恐れて、「健康」に執着するあまり、心のバランスを欠いてしまうことを、筆者は、「健康病」と呼ぶ。つまり「健康でありたい」と望み過ぎるのも、一種の「病氣」だというのである。

気持ちが病氣への不安にばかりとらわれていては、例えば季節の移り変わりを肌で感じることもできないだろう。しかも、家族や友人たちと心を開いて交わるだけの心のゆとりさえ無くしてしまつては、そもそも何のための「健康」なのか。

このように考えてみると、「体に問題がない」というだけでは「健康」であるとは言えないことが分かる。食事や運動による身体管理に過剰にのめり込み、病氣になることへの不安にかえつて支配される生き方は「健康」とは言いがたい。「健康」という言葉の核心は、「豊かな毎日を通し、生きていける精神的な強さや心のゆとり」の方にこそ求められるべきではないか、と私には思えるのである。(三八二字)

解説

本課題では、現代社会において、人々が「健康」というものに縛られてしまい、多様なものの見方ができず、まわりが見えなくなつてしまう「健康病」について書かれた文章が、課題文として提示されている。最近この「健康病」や、「清潔」であることに過剰に価値をおき、いつも手を洗っていないければ気がすまなかったり外出できなくなつてしまう「不潔恐怖症」や「抗菌グッズ」の流行現象を切り口に、現代社会やそこに生きる現代人の問題を論述させようとする出題がいくつかなされている。そうしたことを踏まえ、君達にも、「健康」という観点から、現代社会および現代人について分析・考察していく作業をする機会として、本課題を活用してもらいた

い。

また、課題文筆者の河合隼雄は、日本の臨床心理学者の中で最も著名な人物である（【参考資料】参照）。その著作は、現代文および小論文において、課題文として頻繁に活用されている。一見平易なのであるが、その中で使われているキーワードの意味することを、自分なりに十分検討しながら読解しないと、その内容が把握しにくいタイプの文章である。そうした点を踏まえ、河合隼雄の文章に一度あたっておくとよいと考え、出題した。

【参考資料】河合隼雄（一九二八～二〇〇七）

兵庫県生れ。京都大学卒。京都大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授。元文化庁長官。臨床心理学者。京都大学では数学を専攻したが、高校教師を務めるうちに生徒達の心の問題に直面し、ユング（スイスの精神医学者であり思想家。分析的心理学の創始者）心理学の研究をはじめ。精神分析の創始者フロイトは、父性原理によって人間の無意識を解釈しようとしたが、ユングは母性原理を認めようとした点に着目。こうしたユング心理学の考え方を日欧の文化比較にまで進展させた。日本の昔話と西欧の昔話を比較し、西欧が父性原理に貫かれているのに対し、日本社会は母性原理によることを指摘し、注目される。

著書は、『昔話と日本人の心』（岩波書店）、『こころの処方箋』（新潮社）、『日本人とアイデンティティ』（創元社）、『おはなしおはなし』（朝日新聞社）、『宗教と科学の接点』（岩波書店）など多数。

1 課題文読解

意味段落A：「健康病」の定義・健康病にかかった人々の特徴（形式段落①～④）

論点（テーマ）：「健康病」および「健康病」にかかった人々

- 「健康病」の定義
- (a) それにかかった本人に病気の自覚がない。それ故、被害が潜行する（↓「健康病」の恐ろしさ・その一）
 - (b) ともかく「健康第一」で、そのことにひたすらかかずらわり、他のことは無視してしまう。
 - (c) (b)から生じる近所迷惑など構わない点で、「ほとんど病気」状態だが、それに無自覚。

- ・具体例（健康と食事の関係にこだわるAさんとその家族）の分析から明確になってくること

◆「健康病」にかかった人々の特徴・その①（心の機能停止）

↓（Aさんのように）健康に関することだけしか見ていない人の心のはたらきは、それ以外の点では、ほとんど機能停止状態。

◆「健康病」にかかった人々の特徴・その②（伝染させる相手の探索）

↓他人に（「健康病」を）伝染させることを生き甲斐にしているふしがあり、いかにも親切そうに伝染を試み、他人を気にする。

（↓「健康病」の恐ろしさ・その二）

↓「健康病」の人が他人を気にする（特徴その②の）理由

＝健康第一にしがみついても、自分のことが不安で、仲間をつくり、しがみつく相手を増やしたいから。

意味段落B…（「健康」にこだわる人々の観察・分析から生まれた）筆者の主張（形式段落⑤～⑦）

- ・具体例（よく遊び、よく仕事をした男性が五〇歳代で死んだことを、「あれだけやり過ぎたから若死した」と考えるか、「本人が寿命を感じとっていたからそれだけやった」と考えるか、という考え方の相違）

- ・筆者の主張…人間の人生については多様な見方が可能である。その多様な見方により豊かな人生が送れるのに、「健康病」の人々は健康というただ一つのことにと縛られてしまう精神の貧しさを露呈している。

- ・（現代社会に生きる人々が）「健康病」にかかり（精神の貧しさ）を露呈するようになった理由

＝「心」に関する価値を、それほど評価できなくなってきたことと関係がありそう。

意味段落C…健康病からの回復…筆者の基本的な考え（形式段落⑧）

- ・人間を構成する三つの要素…「体」「心」「魂」（ギリシャの時代の考え方）

- ・（右の考え方を援用した）現代人に関する筆者の基本的考え

＝現代人は、「心」に失望しつつ、魂の重要性を再び認識しかけているが、それを知らぬのでそれを飛び越え、「体」を過剰に大切にしている。(つまり) 最も重要な魂のことを知らぬことから生じる不安を何とかごまかそうとして体を大切にする。

↓それが実感できる例：ジョギング等の運動にこだわる人々に「宗教的情熱」を感じさせられる場合。

＝魂のことに思い及ぶことで健康病からの回復がなされる(のではないか)。

2 設問要求

課題文(河合隼雄氏の『健康病が心身をむしばむ』と題する文)を読み、次の問いに答える。

問1 「食事のときの楽しみ」とはどのようなものか、一〇〇字以内で答える。

問2 「宗教的情熱を感じさせられる」とはどのようなものと想像するか、一〇〇字以内で答える。

問3 健康病は恐ろしいと述べているが、その理由を一〇〇字以内で答える。

問4 あなたは健康についてどのように思っているか。四〇〇字以内で書く。

3 問題へのアプローチ

【問3について】

筆者が「健康病」が恐ろしいと思う理由を、課題文から読み取り、一〇〇字以内にまとめ、説明することが要求されている。

「1 課題文読解」を見れば明らかのように、「健康病」の定義・説明的記述は、意味段落A(形式段落①～④)でなされているので、そこをじっくり読み、言及されている点を、簡潔明瞭な文章でまとめあげればよい(ただし、あまりに簡潔すぎて「説明」にならないのは望ましくない。一〇〇字という字数が設定されていることも考慮し、特にキーワードとなる言葉の内容は押さえるべきだろう)。ポイントを以下に示しておく。

●まとめるべき二つのポイント●

- 1 (健康病にかかっている) 本人は病気と思っておらず、それ故、被害が潜行する点。
- 2 伝染性を持つ点。↓伝染性⇐健康第一にしても自分に不安で、仲間をつくり、しがみつく相手を増やそうとする傾向。

【問4について】

「健康」について、自分の思うことを四〇〇字以内で論述することが要求されている。だからといって、課題文の内容を全く無視した論述は、やはりすべきではない。なぜならば、課題文が君達に提示されている意義がなくなってしまうからである。課題文読解型の小論文が出題される主旨は、「議論の相互性」である。つまり、課題文筆者の主張がまずあり、それに関わらせて、君達が議論を展開させていけるかどうか、チェックされているという点を、認識して取り組むべきだろう。もっとわかりやすくいえば、筆者の投げたきた「ボール」をしっかり受けとめ、その内容をじっくり吟味した上で、今度は君達自身がその「ボール」に君達なりの色付けをして、読み手に投げかけることができているか、ということだ。

その君達なりの「色付け」、すなわち、課題文筆者の主張に対する君達のスタンス(基本的立場：賛成・反対・一部賛成・一部反対など)の決定、「健康」について論じる上での論点設定、「健康」を論じる上で有効な具体例の選択などは、課題文の内容をどれだけしっかりと理解できたかによって、変わってこよう。そこでもう一度、課題文の内容をしっかりと踏まえておこう。

① 課題文の内容の確認

詳しくは、もう一度「1 課題文読解」を読み直してみればよい。特に認識しておいてほしい点は二点ある。一点は、筆者が、人間は「体」と「心」と「魂」という三要素から成るといふギリシヤ時代からの人間観を援用し、「現代人は『心』に失望しつつ、魂の重要性を再び認識しかけているのだが、そんなものは知らぬので、それとび越えて、『体』をやたらに大切にする」「最も重要な魂のことを知らぬことから生じてくる不安を何とかごまかそうとして、体を大切にする」という、現代人に関する基本的考え方を提

示していた点である。

もう一点は、この基本的な考えを土台にして、筆者は「健康病」にかかっている人々に関して、「人生には多様な見方が可能で、それによって豊かな人生を送れるはずを、健康というただひとつのことに縛られてしまい、精神の貧しさを露呈しているではないか」と主張している点である。つまり筆者は、「健康病」にかかった人々のその健康観に異議を申し立てながら、「健康」というものに縛られ人間・人生をみることや、「健康」＝「身体的健康」と考えてしまう、その考え方に問題を投げ掛けていることは理解しておきたい。また、「心」に失望したら今度は「身体」に、というのではなく「魂」に思い及べば、「健康病」の人々は回復するだろう、とも述べている。

② 論述のポイント

(1) 課題文中のキーワード「心」「魂」などの抽象的な言葉の意味を具体化する

①で述べた二点を踏まえると、筆者の言う「心」「魂」とは何を意味するのか理解しないまま、単純に筆者の見解に対する自分のスタンスの決定や、論点設定をすべきではない。特に、最後の「魂のことに思い及ぶことで、健康病からの回復がなされる」という箇所等に安易に同調し、「現代人は『心』に希望を見出せれば、魂を追求でき、健康病から脱することができだろう。真の健康を手に入れることもできるだろう」という課題文筆者の言及を「鵜呑み」にする形の論述にすべきではない。たとえ課題文筆者の主張に賛同するとしても、では筆者の言う「心」あるいは「心の健康」とは何か、また「魂」とは具体的にどういうもののか、という点を十分吟味・検討した上で、論述してほしい。

要するに、課題文の内容を、字面だけの（表面的）理解にとどめておくのではなく、本質的に理解をした上で、論述の方向性を決めてほしい。

(2) 論述の方向性

課題文筆者の見解に対する、君達自身のスタンスを決定する主たるポイントは、先述した「① 課題文の内容の確認」で示した二点であるように思う（もちろん、それが全てではなく、別のポイントを模索し論述に活用してもらってかまわない）。

その上で、君達が「健康」について論じたいことを、論点・主張を明確に、そしてそのつながりを論理で結んでいけばよい。参考までに、考え得る論述の方向性を示唆しておく（まずは自分の思考力をフルに使い考え抜くこと。それでも考えつかない人は参考にしてほしい）。

(a) 課題文筆者の主張に基本的に賛同（一部賛同）する立場

・「健康」とは身体的健康だけで成り立つのではなく、複数の要素から成り立つ（その点では筆者に基本的には賛同）。
→ただし、筆者が言及している「心」「魂」という概念を用いるのではなく、独自の視点から「健康」とは何から構成されるのかを論述する。（文章例①を参照）

・「多様な見方」ができず、「健康」（特に「身体的健康」）に縛られることはやはり問題である。

→ただし、「心」や「魂」の充足を追求しようとすると、「体（身体）」は疎かにならざるを得ない場合もある。

→果たして、「体」「心」「魂」の三要素が全て充足される、パーフェクトな「健康」状態とはあり得るのか。

(b) 課題文筆者の主張に基本的に反対（一部反対）する立場

・「健康」特に現代人が「健康」と考える状態とは、どのようなものか。

→筆者は「現代人は『心』に失望しつつ、魂の重要性を再び認識しかけているのだが、そんなものは知らぬので、それとび越えて、『体』をやたらに大切にすること」「最も重要な魂のことを知らぬことから生じてくる不安を何とかごまかそうとして、体を大切にする」と言及しているが、それは本当だろうか。→検証

2章

【添削課題】

出典：横浜市立大学・国際文化学部人間科学・03年

解答

問1

著者が指摘する〈新個人〉の最大の特徴は、社会的意識の欠如にある。著者が挙げている〈新個人〉の例は一見多様であるが、実は「自分が社会の中に生きており、家族や友人をはじめとする共同体の一員として生きている」ということへの自覚が欠けている点で共通している。たとえば電車内で携帯電話で会話をしている若者は、ほかの乗客にわざと嫌がらせをしているのではない。単に自分の通話が周りの乗客に迷惑をかけていることに気がつかないのである。つまり、〈新個人〉においては周囲や社会に対する意識が欠落しているために、主な関心が自分自身へと閉鎖的に向けられており、個人的な安楽や私的な充足のみに興味や関心も偏ってしまっているのである。このように、〈新個人〉における「個人」は、個の尊厳を実現するために社会の不正や矛盾を改革していくといった、従来の個人主義における「個人」の理念とは、根本的に異質なものだと言える。

(三九一字)

問2

私たち人間は、社会の中に生まれ、育ち、生きていく。私たちは、全く誰の世話にもならず成長し、生きていくことも、社会から孤立して生きることができない。人間は好むと好まざるとに関わらず、本質的に社会や共同体の一員として生きていくように宿命づけられた存在なのである。

だが今日の日本では、こうした社会的意識を欠き、自分の私的領域にしか関心を持たない人びとが、若い世代を中心に増えてきていると、課題文の著者は指摘している。こうした人びとは、既成の社会秩序や価値観を無視して行動するという点では従来の個人主義と

共通しているが、個人の尊厳を守るために社会の矛盾を正していかうという社会的な「公」の意識は持っていない点で、本質的に異質であるという。

社会の一員として生きるということは、社会に従属して生きるということではない。むしろ社会の欠陥や問題点を正し、不正と闘うことが、社会の一員としての責務だというべきであろう。

もちろん、すべての人が社会的活動中心の生活を送ったり、政策論争に没頭する必要はない。しかし、「自分は自分のやりたいことだけにしか興味がない。他人のことや社会の問題は知ったことではない」という生き方も認められるべきではない。それは、「他人からの世話は受けるが、自分は誰の世話もしたくない」という自己中心的で他者依存的な態度であるからだ。

人間が「個人として生きる」ということは、社会から孤立して生きることでも、社会に依存して生きることでもない。そして、他人に頼ってばかりの生き方では、本当の自己実現が図れるはずもない。社会の一員としての役割を果たすことを通じてこそ、自己の様々な可能性を現実の生活の中で実現していくことができるのだ。「公」と「私」とは、本来人間の生活においては切り離すことのできない表裏一体のものである。この根本的な事実を、私たち現代人は再度認識しなおす必要があるのではないだろうか。（七九八字）

解説

1 設問要求

課題文を読んで次の問に答える

問1

- ① 著者が指摘している〈新個人〉とはどういうものかについて述べる。
- ② その際、自分自身の言葉で説明をすること。
- ③ 字数は四〇〇字以内。

問2

- ① 個人として生きるということについて、自分の考えを述べる。
- ② この際、必ず課題文の内容を踏まえた考察を行うこと。

③ 字数は八〇〇字以内。

2 課題文の読解

① かつての「個人」の定義と理念（第一段落）

・現在五十歳ぐらいから上の世代にとっては自明なこと。

(1) 「個人であること」≡封建的な共同体からの離脱、身分的、世代的上下関係への反抗。

(2) その上で、「自分のことは自分で決めること」。「共同体的な価値観にとらわれず、自分で選びとった価値観に基づいて行動すること」。

② 今日の「個人」≡〈新個人〉（第二～六段落）

・「共同体に反する」という点では、「かつての個人」と共通だが、どこが違う。

(1) 「電車の中でケイタイをかける若者たち」

(2) 「援助交際に走る女の子たち」

(3) 「せっせとジムに通い、ダイエットをし、スポーツ自体の楽しみよりも体の線を保つことに心がけている若者たち」

(4) 「職を持ち、稼ぎがあるにもかかわらず親の家でぬくぬくと養われているシングル人間」

←

(5) こうした〈新個人〉が目立つようになったのは一九八〇年代から。↓〈ミイイズム〉〈カプセル人間〉〈おたく〉。

③ 「私的生活へのひきこもり」現象（第七段落）

・現代≡個人として生きることがどういうことなのかを、あらためて問いなおされている時代。

(1) 現代人は社会の網の目の中にかつてないほど深く巻き込まれている。

(2) 実現すべき自己が何であるかが分からなくなっている。

(3) 「健康」「エステ」という言葉にいつもひっかかるようになっていく。

(4) 広く議論するよりも内輪同士のミニ・コミュニケーションを楽しむようになっていく。

④ 「不都合個人」と「新個人」(第八～十一段落)

・ 一九八〇年代当時、〈私〉意識の強化を主張したのは、「強い個人」⇨「不都合個人」の再構築」を念頭に置いてのことだった。

・ 〈不都合個人〉⇨ 集団の圧力に屈せず、安易に周囲に同調せず、〈ノー〉とすることを恐れない。

←

・ いまではその自分も、〈公〉への関心がじわじわと〈私〉の方へ、引きこもりつつある。しかも、〈公〉との緊張関係も失いつつある。

・ 〈新個人〉はひとことではない。

(1) 国会の議論を活字で読むくらいなら、居眠りをしていたい。

(2) 日の丸法制化には腹を立てるが、街頭に出て反対を叫ぶだけのエネルギーは消えている。

(3) 週に一度のジョギングは欠かさないし、朝晩体重のチェックも忘れない。

(4) 「論座」よりは「AERA」を好み、「世界」ではなく「ぴあ」を買う。

3 課題文の考察

① 〈新個人〉の若者たち

著者は、〈新個人〉として次のような例を挙げている。

(1) 電車の中でケイタイをかけまくる若者たち。

(2) 援助交際に走る女の子たち。

(3) セットとジムに通い、ダイエットをし、スポーツ自体の楽しみよりも体の線を保つことに心がけている若者たち。

(4) 職を持ち、稼ぎがあるにもかかわらず親の家でぬくぬくと養われているシングル人間。

これらの例は必ずしも厳密に一貫しているとは言いがたいし、著者の個人的な印象や感覚にしたがって挙げられている面も否めないが、共通する特徴も見取れる。それは、課題文最終段落の結論部にも記されているように、「公に対する関心」が希薄で、「私の方に関心が向けられている」ということである。

たとえば、(1)「電車の中でケイタイをかけまくる若者」は、そうやって携帯電話で会話をするだけで、自分が楽しければそれでよいという意識しかなく、「自分の話し声で周囲の人びとが迷惑しているのではないか」という意識が欠けている。また、「援助交際に走る女の子」は、「自分の身体を自分の好きなように使って何が悪いのだ」と考えるだけで、そのようなことをすれば親が悲しむのではないか、といった考えが欠けている。また、「身体の線を保つことだけを心がけている若者」は、一種のナルシズムに陥っていて結局自分にしか関心が向いていないし、「職も稼ぎもあるのに親の家でぬくぬくと養われているシングル（＝独身）人間」は、「こうやって親の世話になっているままでは、親の老後の預金を食い潰してしまうのではないか」といった、親に対する当然の配慮もなければ、「自分が親の面倒を見てあげなければ」という意識もない……などのように考えることができる。

第六段落で記されている〈ミーイズム〉という言葉は、こういったタイプの個人主義的心性を端的に言い表したものと言えるだろう。自分や自分の関心のある領域にのみ意識が向けられていて、それ以外の周囲の人びとや社会全体への視野が欠けている、「自己閉鎖的」「自己愛的」な特徴を持った人びとのことを、著者は「新個人」と言い表しているものと考えることができるのである。

②〈新個人〉と世代

冒頭で著者は盛んに「現代の若者」の例を挙げているので、〈新個人〉は若い世代に特有の傾向であるという印象を持つひともいるかもしれないが、課題文の終わりの方で、著者は「〈新個人〉はひとごとではない」と述べて、次のような著者自身に関する例を自ら告白している。

- (1) 国会の議論を活字で読むよりも、居眠りを好む。
- (2) 日の丸法制化に腹を立てるが、街頭に出て反対をさげぶことはない。
- (3) 朝晩体重のチェックは欠かさない。

(4)「論座」や「世界」(という政治経済や社会問題を扱った雑誌)よりも(小さな日常に焦点を合わせている)「AERA」や(映画・演劇・コンサートなどの情報誌である)「ぴあ」を好んでいる。

これらの例も、①で検討した「〈新個人〉」の若者たち」の場合と同様に、〈公〉の「政治的・社会的問題」よりも、「個人生活」の方に著者の意識や関心の重点が移っていることが見て取れる。つまり、〈新個人〉の心的傾向は、若い世代に限らず、広い世代に広がりつつあることである。それゆえ、この課題文を「若い世代に対する大人世代の側からの批判」として読み取ってしまふと、著者の主張を誤読することになるので十分に注意する必要がある。

③〈新個人〉誕生の背景

②で見たように、〈新個人〉が一部の自己中心的な若者だけの話でも、いまの若者世代だけの話でもなく、著者(注・著者は一九三四年生まれ)のような世代も含めた、日本人全体に共通する傾向であるとするならば、そうした傾向をもたらした背景には日本社会全体の抱える問題点がある、と考えるべきだろう。つまり、現代の日本社会の特徴が、現代の日本人の精神性に影響を与え、〈新個人〉化を促しているのではないか、ということである。それでは、〈新個人〉化をもたらした要因とは何なのであろうか。

その要因については、課題文中で明確に指摘されている訳ではないが、第七段落の記述が手がかりになるものと考えられる。筆者はそこで、私たち現代人は、「社会の網の目の中にかつてないほど深くまきこまれていく」と指摘している。つまり、社会構造の網の目の中に、個々の人間が取り込まれてしまつて、一見すると、「自由に個人として振る舞っているように見えるが、一つの流れの中に組み込まれている」というのである。このため、「実現するべき自己が何であるかが分からなく」なり、「政治的に無関心になり、私的生活に引きこもるようになる」なつてしまつていくのである。

戦後の復興期から高度成長期を経て、一九八〇年代には日本の社会構造は政治的にも経済的にも強固なものとなつて完成のレベルに達した。そうすると、六〇年代・七〇年代までのように、個々人や一般の民衆の力で社会を根本から変革できるのではないか、という思いを抱くことは困難になつてしまつた。巨大な社会システムの中で、一人ひとりの個人は非常に小さく無力な存在に過ぎないということが実感されるようになってきた。そのような無力感によつて、人びとの意識が「政治」や「社会改革」という〈公〉的な領域から、〈私〉的な個人生活の領域へと重点を移すようになってきたということなのではないか。

ただ、そうした無力感は経済成長によってもたらされた便利で豊かな日常生活に覆われて、意識の表面では実感されず、曖昧な挫折感や苛立ち、解消されない不満感といったかたちで蔓延していくことになる。一九八〇年代以降、「理由なき衝動殺人」と称される事件が増加したのは、このような社会的変化の影響も存在するのかもしれない。

④「強い個人」Ⅱ「不合意個人」と「新個人」の相違点

著者は〈新個人〉のことを、「共同体的な規範を侵犯」して「周囲のことを気にしない」存在だと述べている。一方、著者が理想とする「強い個」とは「集団の圧力に屈せず、安易に同調せず、〈ノー〉ということを恐れない〈不合意個人〉」だという。だが、この記述だけでは、〈新個人〉と「強い個人」Ⅱ「不合意個人」との違いは十分に明確だと言い得ない。「共同体や規制の価値観への反抗」という側面に目を向けるだけだと、両者の間の相違は、著者が課題文の冒頭で繰り返しているように、「どこか違う」という曖昧な感じでしかつかめなくなってしまうので注意が必要である。

著者は課題文の最終段落で、半ば自嘲気味に「大きな議論をしている『論座』はほとんど手にせず、小さな日常に焦点を合わせている『AERA』は読んでいる」と述べている。これは、〈新個人〉と「強い個人」Ⅱ「不合意個人」との根本的な違いが、「社会性の有無」にあることを端的に示している。〈不合意個人〉とは、社会に対する関心を保ち、社会をよりよい方向へと改革しようという意識に基づいて、既成の社会的な問題点や不合理を批判し、権力者や特権階級の腐敗・横暴に対して〈ノー〉を言えるような「強さ」を持っている存在なのである。

これに対して、〈新個人〉は、社会を改革し、不正を糾弾する、という「強さ」や「社会意識」は持たず、もっぱら「自分個人の満足や快適さ」のみを重視する。電車内で大きな声でケイタイで会話をする人間は、社会的不正をなくすために闘うのではなく、自分の通話をとがめだてする人間に憎悪と敵意をむき出しにするような存在である。仮に「日の丸法制化」というような「権力の横暴」に腹を立てることがあっても、自分の安楽な生活を犠牲にして「街頭に出て、抗議活動を行う」ということまではしない。

つまり、〈新個人〉と「強い個人」Ⅱ「不合意個人」との違いは、〈公〉に対する意識の有無にあると言えるのである。

4 答案作成の指針

問1

① 設問要求

- (1) 著者が指摘している〈新個人〉とはどういうものかを述べる。
- (2) このとき、自分自身の言葉で述べなくてはならない。
- (3) 字数は四〇〇字以内。

② 構想の指針

- (1) 〈新個人〉とはどういうものか

〈新個人〉とはどういうものか、については、「3 課題文の考察」でも検討したが、ここでも簡潔にその主な特徴を整理しておく。

① 個人を重視し、共同体における既成の秩序、規範、慣習への無視や反抗。

② 「私」的な領域や日常生活へと関心が向けられており、「公」の領域や社会問題への関心が希薄。

①は「従来の個人」や著者の言う「強い個人」、ボードリヤールの〈不合意個人〉と共通する面であり、②が根本的に異なる面である。答案ではこの両面について触れておく必要がある。〈新個人〉とは、①と②の両面を表裏一体のものとして併せ持つような存在だからである。

(2) 自分自身の言葉による説明

今回の設問では「自分自身の言葉で説明する」ことが求められている。つまり、一般の要約説明などのように、課題文の記述を引用しながらまとめるのではなく、課題文の内容を正確に把握した上で、自分自身の表現を用いて〈新個人〉とはどのような存在

なのかを説明しなければならないのである。「自分の言葉」を用いることで、著者の主張内容から外れてしまうことのないように十分に注意してまとめていこう。

問2

①設問要求

- (1) 「個人として生きること」について自分の考えを述べる。

(2) 課題文の内容を踏まえて考察する。

(3) 字数は八〇〇字以内。

②構想の指針

答案作成に際しては、漠然と「個人として生きること」についての私的感想を述べるだけのような答案になってしまうことのないように留意する必要がある。そのためには、小論文の基本通り、著者の主張を正確に把握した上で、その主張に対する「肯定補充」か「批判検討」を行うかたちで構想を整理していくとよい。

(1)課題文の主旨

課題文の論旨は、「2 課題文の読解」の項で整理しておいたが、ここでも簡潔に主旨を確認しておこう。

著者の基本的な主張は、次のようにまとめることができる。

- ① 今日の若者世代には〈新個人〉が増えつつある。
- ② 〈新個人〉は〈私〉の領域や日常生活へと関心が向けられており、〈公〉への関心が希薄である。
- ③ それゆえに〈新個人〉の「個人」も、「既成の枠組」や「共同体的な規範」に対する反抗という点では、以前の「個人」と同じだが、社会問題を糾弾し、権力の不正に対して抗議する、「強い個人」≡〈不合意個人〉のような社会的意識や自立性は欠けている。

④こうした〈新個人〉化の傾向は、若い世代に限らず、筆者を含めた上の世代にも浸透しつつあり、日本人全体の直面する問題だといえる。

端的に言えば、〈不合意個人〉としての個人主義は肯定的に評価できるが、〈新個人〉としての個人主義は望ましい個人主義のありかたではない、というのが著者の立場である。以上を踏まえた上で、「肯定補充型」と「批判検討型」の構想例を挙げておく。参考にしてほしい。

(2) 著者の見解に対する肯定型の構想例

著者の見解を肯定する場合は、①〈新個人〉の生き方の問題点や弊害、②〈不合意個人〉の望ましい点、などを明確に示しながら、論じていくのが基本である。

① 〈新個人〉の問題点・弊害の例

- 「自分さえよければ構わない」という自己中心的風潮や利己的な価値観が蔓延するようになる。
- その結果、個人間の対立や憎悪、トラブルが増えるようになる。
- 社会的なモラルや秩序、信頼関係が失われ、安心して生きていくことのできない社会になっていく。
- 〈公〉への関心が希薄なため、社会問題や政治的不正などが放置され、解決が困難になる。
- 自分のことばかりに目が向く人間が増えると、社会的弱者への配慮が欠けていくようになる。

② 〈不合意個人〉の長所

- 社会問題や政治的不正を改善していくことが可能。
- 社会的弱者への配慮を高めることができる。
- よりよい社会を目指す理念を提示できる。

〈新個人〉において重視されるのは「自分個人の安楽や満足」なので、たとえば「自分が疲れていれば、お年寄が立っていても、平然とシルバースーツに座ってしまう」といった行動が見られることになる。このようにして、結果的に立場の弱い人を追い詰めてしまう面もあることは忘れてはならない。また、差別を受けて困っている人びとがいても、「自分には関係ない」という態度で関わろうとしない人びとが増えれば、困っている人々は孤立無援となって救済されなくなってしまう。

一方で〈不都合個人〉が既成の共同体のあり方に反抗するのは、その既成の秩序を個々人の権利や幸福を侵害する不正なものと捉えるからである。つまり、〈不合理個人〉が尊重する「個」とは、「私自身」のことではなく、「すべての人が有する個人としての尊厳」のことなのである。それゆえに、〈不都合個人〉の場合は、「自分が疲れていても、お年寄が立ったままであれば、お年寄りの身になって席を譲る事ができる」し、「差別されている人」がいれば、直接自分が差別されているわけではなくとも、「個人の尊厳が冒瀆されている状況を改善する」ための支援活動に取り組むこともある。このようなかたちで、〈不都合個人〉においては「個の尊重」と「公の意識」とが一体となって両立しているのである。

〈公〉に対する意識の有無は、「個人主義」のあり方も、このように根本から異なったものとしてしまうものである点を明示しながら論じていくとよいだろう。

(3) 著者の見解に対する批判型の構想例

著者の見解に批判を加える場合は、①〈新個人〉の生き方の長所、②〈不都合個人〉の問題点を指摘すればよい。

①〈新個人〉の生き方の長所

- 他者の人生観や価値観に干渉せず、自分の生き方を相手に押しつけない。
- 自分の身近な生活や関係を大事にできるので、空理空論に偏りにくい。
- 道徳や倫理といった建前より、素直な感情や感覚を尊重できる。

②〈不都合個人〉の問題点

- 自分の正義感や倫理観を他人に押し付ける結果になる場合もある。
- 実質的に、個人生活を軽視し、社会生活を偏重してしまう場合がある。

○理想論に走って、身近な現実から遊離してしまう場合がある。

○自己の内面を深めることを軽視し、社会的・外的な「形に見える活動」に偏る場合がある。

〈新個人〉の人びとの特徴は「自分は自分、他者は他者」という割切った感覚でもある。これは一見、冷淡に見えるし、実際にそういう部分も否定できないのだが、お互いの価値観や生き方に干渉しないという態度にもメリットはある。〈不合意個人〉の人びとの主張する「公の理想」や「社会正義」の中には、結局その人個人の理想や独断的正義に過ぎないものもある。だが、当の本人は、「自分は社会のために主張し、正しい行動をしているのだ」と思っているだけに、自分自身の独善性に気がつきにくくなっている。それは、自国の考える「正義や理想」を諸外国や異文化圏に押しつけようとして、様ざまな紛争や異文化対立を引き起こして来たアメリカの姿を連想させる面もある。

〈新個人〉の「相互不干渉」的な生き方は、価値観が多様化し、複雑化した社会の中で、摩擦を生じないようにして生きるための「知恵」であるとも言い得るのである。

（その他の構想例）

そもそも現代の若者たちが〈新個人〉化しているという著者の分析自体が誤りだという批判も可能である。事実、今日においての、災害被災地の支援や、高齢者・障害者の世話などのボランティア活動に熱心に取り組んでいる若者も多いし、きちんと席を譲ったり、お年寄りの荷物を持つてあげる若者もよく目にすることができる。著者の「若者」観はいかにも雑誌やマスコミで喧伝されがちな「いまどきの若者論」の定型パターンに従ったものであるとの印象も否めない。（実際には「電車内で携帯電話で会話をしている中高年」もしくは目にするし、「援助交際をする少女」などはほんの一握りに過ぎず、圧倒的大多数の少女とは無関係である。）

また、著者はあたかも「論座」や「世界」の方が、「AERA」や「ぴあ」よりも高等な雑誌であるというような書き方をしてるが、どうして「政治・経済」の方が「演劇・映画・音楽」よりも価値が高いと言えるのだろうか。

ここに著者自身の判断の偏りを見て取ることもできる。そして、著者は自分自身の考え方が必ずしも公平なものではないということにも気付いていないように思える。このような著者自身に見られる自己中心性を批判しながら考察を進めていくこともできる

だろう。

以上のように課題文に対しては多様な方向からのアプローチが可能である。独自の視点を積極的に示すことができるように工夫していこう。

3章

【添削課題】

出典：東京外国語大学・外・98年

解答

問1

クレープ屋の行列に行き当たりつい並んでしまった。このとき私の欲望とその対象のクレープは直線で繋がっているようだが、実は他者たちの欲望に媒介されて成立している。こうした欲望発生を図を欲望の三角形という。

(二〇一字)

問2

商品のイメージが喚起する理想の自己像とは、他者に羨望される存在としての自己像である。理想と現実の落差を埋めるため、人々は他者の欲望に合わせて自己を形作ろうとする。こうして人々が同じ欲望を抱くことで成立するのが「分身たちの共同体」である。

(二一八字)

問3

筆者が考えている「本来のじぶん、そうあるべきじぶん」とは、ショーウィンドーの商品を身に帯びたときのじぶんのイメージであり、他者が羨望のまなざしを向けるであろうじぶんの姿である。では、そうした「本来のじぶんになろうとじぶんを演出しはじめる」というのはどういうことなのか。筆者の指摘に沿って具体化すると、「本来のじぶん」のイメージを喚起した商品を手に入れそれを身に帯びる行為がまず考えられる。

だが、試着室の鏡の中のじぶんの姿が常に満足できるものとは限らない。輝いて見えたじぶんのイメージはあえなく破綻する。これ

解説

はなぜなのか、鏡の中にその答えがある。例えば肥満、例えば肌荒れ、例えばしわ。ならば、それを直せばいい。こうして人々が次に向かうのは、エステであり、美容整形だ。マネキンのような身体、美人女優、ハンサムな俳優のような顔、それはきっと他者の羨望のまなざしを独占するだろう……。このとき欲望の対象はもはやモノではない、消費の対象は自分の身体だ。自己演出が到達したのはこうした消費社会の姿である。

だが身体改造には限界がある。美人もやがては老いるし、羨望の視線を期待する他者との関係が生むのは孤立と不安だ。一方でそうした現実には気付き始めた人もいる、消費の構造は変質し始めているのではないかと私は思う。ボランティアなど、商品が介在しない関係を求め模索する人々の増加がその証である。

(五八六字)

1 課題文の内容及び論理構成

① 論点

物財が豊かな社会において、資本の増殖運動は自らの進展のために、稀少性の創出、欲望そのものの産出を企てる。他者の所有する対象への欲望が、対象そのものへの欲望であるかのように偽装されて発現してくるよう仕組まれるのだ。そのように物の誘惑、主体の欲求を偽装させる心的機制とは、いったいどのようなものなのだろうか。

② 分析(論点の解明)

- (1) ショーウィンドーの商品やカタログ誌の商品広告が誘惑的なのは、そのシンボリック価値によってである。即ちそこではイメージが消費される。
- (2) そのイメージが供給するのは、「わたし」たちのひとりひとりが、固有のものとしてじぶんを提示し、ディスプレイするときの方式、モデルである。そこで空想されたセルフ・イメージと現実の自己解釈との落差が、欠落感を生み出す。(欠落感＝欲望を導き) こうしてひとは欲望の主体、「消費者」になる。
- (3) 商品とは、ひとりひとりの「わたし」の属性として消費されるべき可視的な「財」であり、人びとは互いに模倣しあいながら欲望を同型的にかたちづくり、それぞれの存在が互いに反射しあう鏡のような関係(＝「欲望の三角形」)に入り込む。自

- 己を反省する回路と、自他が互いに反射しあう回路が一致することで、そこに〈分身〉たちの共同体ができあがるのだ。
- (4) 欲望の同型的な発生は、商品の大量生産構造に擬せられる。欲望が模造され、欲望の主体が複製され、消費主体と消費対象が互いに映しあう、リフレクシヴな相互作用の中で、それぞれの境界が消滅していく。

③ (分析結果をうけての) 筆者の主張

わたしたちはここで、主体と物との間に発生したある種の変容を見逃してはならない。即ち、消費活動とは「欲望の隠喩的な遠回しの表現」であり、それは「差異表示記号を通じた価値の社会的コードの生産」という社会的機能に対応するものなのだ。そういう記号体系のなかで、ひとは、本来のじぶんになると、じぶんを演出しはじめるのである。

2 問1について

① 設問要求

- ① 課題文中の傍線部A「欲望の三角形」とは何か、説明する。
- ② 具体例を挙げる。
- ③ 一〇〇字前後でまとめる。

② 解答作成へのアプローチ

問われている「欲望の三角形」は第二段落と第七段落中に示され、説明されている。よって、基本的にはその二つの段落内容に着眼し、ポイントをまとめていけばよいが、より確かな理解と、具体例探しのためには、課題文全体の読解が必要であろう。

(1) 「欲望の三角形」読解のポイント

いうまでもなく「三角形」は、三つの点とそれぞれをつなぐ三本の直線(線分)により構成される平面図形である。よってここでは、三つの点に相当する要素とそれぞれをつなぐ関係、特徴を押さえることがポイントとなる。

・三つの点：欲望の対象・欲望する主体・媒体（他者）の欲望

・関係：欲望する主体は、他者の欲望を通して、対象への欲望を形成していく。（あるいは）対象と欲望との関係は、他者の欲望に媒介されて成立している。

・特徴：欲望はその媒体を隠蔽し、「自律した欲望」であることを装おうとする。人びとは互いに模倣しあいながら欲望を同型的にかたちづくり、それぞれの存在が互いに反射しあう鏡のような関係に入り込む。

(2) 具体例の選択

(1)で整理したポイントを満たすような事例を探せばよい。日常の暮らしを振り返れば、いくつも思い当たることがあるだろう。例えば

・「行列のできるラーメン屋」というテレビ番組の中で人々の行列と美味しそうにラーメンを食べる他人の姿を見ることにより、ラーメンを食べたくなった経験。

・よそのうちのかわいい子犬をみて、子犬を飼いたくなり、親にねだった経験。

・アイドル歌手が身につけているアクセサリーと同じような物を友達がしているのをみて、自分も欲しくなったこと。
……などなど

3 問2について

① 設問要求

- ① 課題文中の傍線部B「〈分身〉たちの共同体」について、筆者の考えにそって述べる。

② 一〇〇字前後でまとめる。

② 解答作成へのアプローチ

(1) 「〈分身〉たちの共同体」の説明が示されている箇所に着眼する。

「〈分身〉たちの共同体」（傍線部B）は、課題文の第七段落にある。その段落の中で筆者は「〈分身〉たちの共同体」について、どんな説明をしているだろうか。

↓「自己を反省する回路と、自他がたがいに鏡のように反射しあう回路が一致することで、そこに〈分身〉たちの共同体が
で上がるのだ。」

基本的にはこの部分を示すことで問に答えることが可能であるが、ここでの筆者の表現は抽象的でわかりにくく、このままでは「〈分身〉たちの共同体」とはどういうものなのか明確に伝わってこない。そこで次に必要なのが、この内容を説明していく作業である。

(2) (1)で押さえた箇所の内容を説明する。

(1)で押さえた一文を次のように分けて考えると作業をスムーズに進めることができる。

(a) 「自己を反省する回路」とはどういうことか。

反省とは、一般に「自己のあり方について自分自身で考えてみること」である。本文中では、「自己解釈」という表現も使われている。消費社会における「反省」のあり方を課題文筆者がどのように論じているのか、整理していこう。

消費社会において自己のあり方について考えることは、商品が提供する「望ましい自己」の像と、「現実の自己」との間の落差を人々に自覚させてしまう。この「望ましい自己」についてどのように述べられているのか……という視点から、課題文を読み返してみれば、それが第六段落の冒頭に示されており、さらに「自己を反省する回路」の意味（メカニズム）についてもショーウィンドーは「その前にたたずむ彼女（あるいは彼）の理想化されたイメージを、彼女が買い、なることもできそうなモデルという形で〈反射〉してくるガラス……」であり、「ガラスの前にたたずむ彼（または彼女）」に、（中略）『本来の』姿にいたるにはまだ何かが欠けている存在として意識させる。こうしてひとは、満ちたりたということを知らない欲望の主体」となるというように分析されていることに気付くはずだ。よって「自己を反省する回路」については、第六

段落の内容（商品のイメージ化を通しての「望ましい自己」と「現実の自己」との落差の意識化と、欲望産出の仕組み）を要約すればOKということになる。

(b) 「自他がたがいに鏡のように反射しあう回路」とはどういうことか。

これと同内容の記述があるのは、第七段落の一文目である。そしてこの内容はそれに続く文の中で説明されていく。即ち「欲望の三角形」に絡め取られ人びとは「他者のまぶしそうな視線……を捕らえようとして、自己が何者であるかをデイスプレイする。しかしその方式が皮肉にも同じ基準に従っている……」というのだ。この基準というまでもなく(a)で押さえた欲望産出の仕組みである。以上から(a)と(b)の「回路が一致する」というのは、「自分には何かが欠けている」という感覚が、他者の羨望の対象となる存在へと自己を演出したいという欲望を生み出し、同じプロセスが他者にも発生することによって、自己と他者の欲望が同型となっていくプロセスに該当していることが分かるだろう。

4 問3について

① 設問要求

① 筆者が「本来のじぶん、そうあるべきじぶん」をどのように考えているかを明らかにする。

② 「本来のじぶん、そうあるべきじぶんになろうと、じぶんを演出しはじめるのである」とはどのようなことなのかについて、自分の考えを展開する。

③ 四〇〇字以上六〇〇字以内でまとめる。

② 論述作成へのアプローチ

(1) 「本来のじぶん、そうあるべきじぶん」を筆者はどのように考えているのか。

これについてはすでに前問で見てきたので、ここでは必要ポイントの紹介にとどめておく（考え方については問2の解説を参照）。

◎少なくとも以下の二点（が表している内容）を押さえることが必要だ。

- ・ショーウィンドーの中の商品を身に帯びたときのセルフ・イメージ
- ・他者の賞賛や尊敬や羨望のまなざしを集める自分のイメージ

(2) 「本来のじぶん、そうあるべきじぶんになろうと、じぶんを演出しはじめるのである」とはどのようなことなのかについて、自分の考えを展開する。

問われているのは「本来のじぶんに向けての演出」の内容を説明していくことである。ここで注意しなければならないのは「本来のじぶん、そうあるべきじぶん」についての筆者の考えをふまえねばならない、つまり課題文の正確な読解をベースとしての説明が必要である、ということだ。

説明の仕方には次のような二つの方向が考えられよう。字数配分に留意して、構想を練るとよい。

(a) 具体例（検証）に基づく説明（具体例中心の論述）

「本来のじぶん、そうあるべきじぶん」についての筆者の考えを現実に照らして明らかにし、そうした自分になるために、わたしたち（人びと）がどんなことに努めているのかを具体的に追ってみる。

＊このやり方をとるとき注意したいのは、具体例の提示だけで終わらせないことだ。具体例が意味することを自分なりにきちんとまとめたり、あるいは（設問では特に要求されていないが）そのことについての自分の考えを簡潔に示すなど、論述として完成させることを目指そう。

(b) 論理に基づく説明（分析中心の論述）

課題文筆者の主張をふまえて、人びとが「本来のじぶん、そうあるべきじぶんになろうと、じぶんを演出しはじめる」とこの意味や根拠を説明していく。

＊このやり方をとる場合注意したいのは、観念的な思考に終始しては説得力を欠いてしまうおそれがあるということだ。要求テーマは消費社会即ちわたしたち（きみ自身）が暮らすこの社会を対象としたものである。つまり分析・考察のべー

スとなるのは自分が生きる現実だという点を確認し、論考を進めていこう。



会員番号

氏 名